

「タブレット狂騒曲」

今井政廣

大阪・中学校教員

池田亮子

東京・保護者／
新日本婦人の会中央本部

吉田雅人

埼玉・塾経営／
さいたま市の学校と教育を考える
市民の会

聞き手

木村浩則・糀谷陽子

『人間と教育』編集委員

木村 一人一台のタブレットが入り、教育DXという形で、学校教育のあり方を変えていこうとする動きが強まっています。今日は、その中で子どもたちと学校、家庭の状況について、リアルなお話をお伺いしたいと思います。タブレットを使う子どもたちの様子、それに対してどんなふうに向き合っているか、教育委員会や文科省に求めたいこと、民研や教職員組合のとりくみへの提案などもお聞きしたいです。よろしくお願いいたします。

今井 うちの学校では、授業中にタブレットを使っているゲーム、動画視聴、好き勝手な調べ物が横行しているように思います。教員は前に立っているの、子どもの手元が見えません。教員が二人いる時は、「何してんの?」「やめときや」と言えますが……。学習以外には使わないというルールがありますが、我慢できないようです。教育委員会は関係のないサイトが見られないようにしていますが、子どもは迂回する方法を見つけ、共有して



います。子どもたちのネットワークで広がる場合もあれば、学習用のノートを共有するファイルを使って、あるいは自分が作ったプログラムを公開するところに「このサイトはこうすれば解除できる」と書き込んだりしています。真面目に授業を受けていた子どもたちも、それを見て「おもしろそうだな」と遊ぶ方に流れていってしまふこともあります。もう一つ、デジタルドリルなど、ゲーム感覚で「勉強」できるソフトがたくさんあります。子どもは問題を見

て反射的にボタンを押していますが、なぜそうなるのか、歴史だったらどういう背景があつてそうなったのか、理科だったらどういう理論でそうなっているのかを考えて解いているのかと、見ていてとても不安です。でもこれは、学習端末が来る前に家でやっていたことが、そのまま学校に持ち込まれたということかな、とも思います。それまではスマホは家だけで、学校ではデジタルと切り離されていたものが、今は家でも学校でもデジタルにつながり続ける。それに時間を取られすぎて、実験をする場面がどんどん削られていることも、重大な問題だと思います。

池田 この春、中学校を卒業した男の子がいます。その子が小五になる春にコロナが始まり、私学だったので端末の配付は無く、家のパソコンでZoomの授業を受けていました。中学に入って自分用のパソコンを買い、スマホも持ち、それ以降、デジタルにどっぷり浸かった生活です。他のみなさんのお話を聞くと、高校に進学する時は公立でも家庭で端末を用意しなければならず、東京都はあとで補助が出るとは言え、制服代が一〇万円かかり、教科書も買わなきゃいけない。経済的な負担がとんでもないことになっています。何とかならないものかと